

平成26年度
URA 活動実績報告書
(概要編)

平成27年4月
(平成27年12月 誤記訂正)

国立大学法人 神戸大学
学術研究推進本部
学術研究戦略企画室

目 次

はじめに	3
I. URA の役割・組織・業務について	4
1. URA の役割	
2. 組織構造	
3. URA と連携創造本部 ―協力と分担―	
4. URA の業務内容	
5. 平成 26 年度の重点項目	
II. 活動報告概要編	
1. まえがき	7
2. 指標改善に関する実績	7
2. 1 科研費	
2. 2 拠点形成事業（COI 等）	
2. 3 戦略的研究推進事業（CREST・さきがけ）	
2. 4 省庁系大型競争資金	
2. 5 論文の質・量（国際化）	
3. 中長期的な仕組みづくり	9
3. 1 若手研究者の支援・育成	
3. 2 新規プロジェクトの創成支援	
3. 3 女性研究者支援	
3. 4 学内ネットワーク	
3. 5 学外ネットワーク	
3. 6 学内学外広報	
3. 7 研究不正防止	
4. 研究戦略策定支援	11
5. むすび	11

はじめに



神戸大学は、平成 25 年度文部科学省「研究大学強化促進事業（22 機関）」に採択され、10 年間の支援を受けることになりました。この事業は、日本再興戦略の一環として、世界水準の優れた研究活動を行う大学群の増強を目指したものです。研究マネジメント人材として URA (University Research Administrator) を配置し、研究力強化に取り組むことが求められています。平成 27 年 4 月までに 8 名の URA が採用され業務を開始しています。事業 5 年目の中間評価では、後述の研究力評価指標の改善状況が厳しく評価されることになっています。研究力評価指標の改善は、研究力強化の仕組み作りと並んで、URA の重要な任務です。

大学を取り巻く環境を俯瞰しますと、国家財政の危機的状況はエスカレートしており、また世界で見た日本の大学の地位低下が叫ばれるなか、国立大学法人への風当たりは益々強まっています。その中で大学への交付金は漸減する一方、競争的資金は増加傾向にあり、また斬新な取組みや大胆な改革を行う大学に交付金を集中させる動きも進行しています。さらに研究大学強化促進事業においては、神戸大学に対する文部科学省の評価は今後の期待も含めて厳しいものでした。このような状況の中、我々はいくつかの点を強く心に留める必要があります。(1)神戸大学が「知」を創造する大学としての使命を果たすべく、研究力強化の方策を全教員・職員・研究者が一丸となって考え実行すべきときであること、(2)待ちの姿勢で研究資金が得られる時代は終わりを告げ、研究資金の獲得に大きな努力を払わねばならない時代が来たこと、(3)交付金の減少を大型競争資金の獲得で補いさらに拡大することで、研究成果を上げ続けるための経済的基盤を確保すること、(4)研究成果の世界への発信と、海外との共同研究をさらに活発化させる努力により、我々の研究力にさらなる磨きをかけること。

このような厳しい環境の中にあって、URA の責任はたいへん重いものと考えます。本報告書では、はじめに URA の役割と業務内容を概観した後、URA 活動の実質的初年度にあたる平成 26 年度の活動内容と成果をまとめます。URA 業務の全般について手探りで取り組んだ 1 年でしたが、教職員の皆様方の手厚いご支援とご協力により、まずまずのスタートを切ることができました。URA の活動が研究力強化を含め神戸大学の学術研究推進の一助となることを願ってやみません。

平成 27 年 4 月

学術研究推進本部 学術研戦略企画室
室長 特命教授、シニア URA 瀧 和男

I. URA の役割・組織・業務について

神戸大学における URA (University Research Administrator) の役割、組織、業務について概要をご紹介します。

1. URA の役割

URA の最も基本的な役割は、部局の皆様の協力を得ながら以下の 3 点を推進することです。

1. 研究大学強化促進事業の中間評価に向けた指標改善
2. 中長期的に効力を発揮する研究力強化の仕組み作り
3. 神戸大学全体の研究戦略の策定支援・実行

2. 組織構造

組織図を以下に示します。学術研究推進機構の中に、学術研究推進本部と連携創造本部があり互いに協力して活動しています。学術研究推進本部の中に、学術研究戦略企画室が設置され、平成 27 年 4 月現在で 8 名の URA (内 2 名は連携創造本部兼務) が配置されています。



図 1.1 組織図 (平成 27 年 4 月現在)

3. URA と連携創造本部 ー協力と分担ー

URA は下図に示すように、研究の始点（研究の萌芽期）から研究の中間段階（研究としての成果が出る頃）までの支援に主な焦点を当てて活動を展開しています。研究の中間段階の支援や、競争資金の獲得支援では、連携創造本部と協力しています。

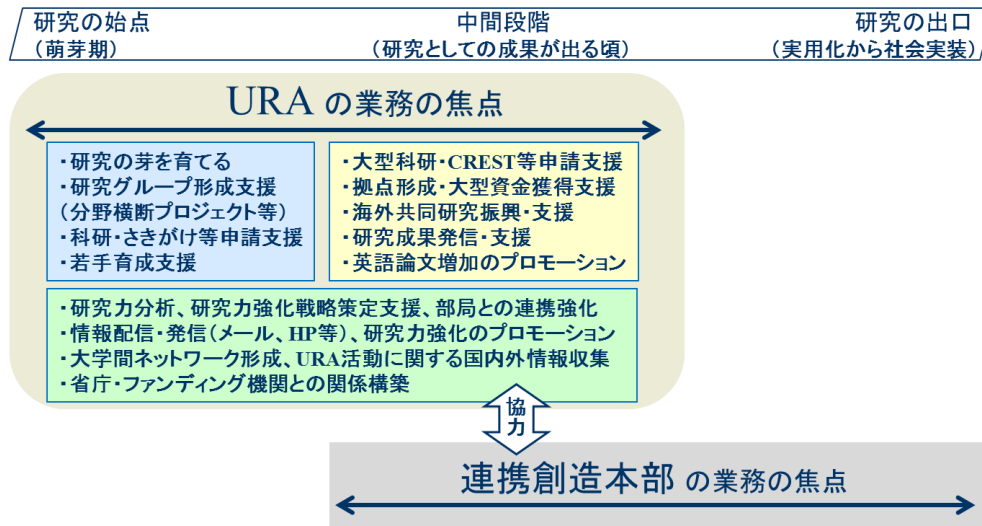


図 1.2 URA と連携創造本部 ー協力と分担ー

4. URA の業務内容

URA の役割を詳細化・具体化した URA の業務内容について以下の表にまとめます。表の上半分は「研究力評価指標の改善」に関わるものです。右端には、対応する研究力評価指標の番号を記載しています。また URA、連携の欄は、URA と連携創造本部の分担・協力を○印で示しています。また表の下半分は「中長期的仕組み作り」に関する業務内容です。

URA8 名のうち、6 名が学術研究 URA、2 名が産学連携 URA であり、後者は連携創造本部と一体となって活動します。

表 1.1 URA の業務内容と連携創造本部との分担

区分	業務の大項目	小項目	取組みの内容	URA	連携	評価指標
研究力評価指標の改善	1 科研費	採択状況の改善	セミナー、申請書作成支援等を企画中。 部局の取組みとの摺合せ・協調。 若手研究者の支援・育成に注力。	○		1-1~ 1-4
	2 大型競争資金 (プロジェクト)	拠点形成事業(COI等)	研究者・部局への働きかけ、プロジェクト化と研究提案申請を支援。	○	○	1-5
		戦略的研究推進事業 CREST・さきがけ・ERATO	セミナーの実施、研究チーム編成支援、申請書作成支援など。	○		1-6
		省庁大型競争資金	大型公募情報の特定部局への配信、プロジェクト化支援、申請書作成支援など。	○	○	—
	3 論文の質・量 (国際化)	被引用数の改善	英語論文の推奨・支援、若手向け英語論文作成セミナー等の企画中。	○		2-1
		国際共著論文数拡大	国際共同研究振興メニュー企画中。 国際共同研究向け資金獲得支援。	○	○	2-2
	4 産学連携	協力研究の額・伸び率	連携創造本部主導で進める		○	3-1
知財収入の額・伸び率		同上		○	3-2	
中長期的 仕組 み作り	5 若手研究者の支援・育成		次世代を担うべき若手のピンポイント支援と全体レベルアップの両面で支援。 海外派遣や学際ネットワーク構築の支援。 各種スキルアップセミナーやインセンティブ企画を検討中。			
	6 新規プロジェクトの創成支援(学際ネットワーク 創生の支援)		医工連携・文理融合など分野横断プロジェクトの芽を育てる企画を検討・実施。 分野横断交流会・研究会やインセンティブを検討・実施。			
	7 部局とのネットワーク確立		部局訪問の繰り返し実施、双方向情報伝達ルートの確立。			
	8 研究力分析と研究戦略策定支援		評価指標数値の分析・アップデート。部局の研究戦略策定を支援。			
	9 学内学外広報		学内メール配信、ホームページによる学内外情報発信、研究成果情報の発信。			
	10 その他		省庁・他大学・海外機関とのネットワーク作り、国内海外のURA情報の収集など。			

5. 平成 26 年度の重点項目

URA 業務の平成 26 年度の重点項目は以下の通りです。

研究力評価指標の改善に関する取組み

1. 科研費、CREST・さきがけの採択改善
2. 論文の質・量(国際化)の改善に向けた仕組み作りと試行

中長期的な研究力強化の仕組み作り

3. 若手研究者の支援・育成
4. 新規プロジェクトの創生支援

II. 活動報告概要編

1. まえがき

平成 26 年度は URA にとって、実質的な活動の初年度にあたります。多くの業務を手探り状態で進めることになりましたが、教職員の皆様のご支援・ご協力により、まずまずのスタートを切ることができました。

平成 26 年度業務の重点項目として、研究力評価指標の改善に関する取組みでは、1. 科研費、CREST・さきがけの採択改善、2. 論文の質・量（国際化）の改善に向けた仕組み作りと試行に力を注ぎました。中長期的な研究力強化の仕組み作りとしては、3. 若手研究者の支援・育成、4. 新規プロジェクトの創生支援に注力しました。

この活動報告概要編では、これらの重点項目を含め、URA の活動内容と成果について、コンパクトに要約いたします。

2. 指標改善に関する実績

2. 1 科研費

平成 26 年度は神戸大学における科研費採択の分析と支援制度の構築に力を注ぎ、科研費支援の基盤構築を目指しました。過去 5 年の採択実績をあらゆる角度で分析し、執行部と各部局に報告しました。分析を元に、若手種目の採択率向上と採択金額の増加を目指して、申請書作成の早期支援・通常支援をはじめとした支援制度を構築し実施しました。初心者向けのセミナーを計 4 回実施し、さらに研究者に対して合計 79 件の申請支援を行い、28 件の採択に貢献できました。特に若手研究（B）への支援では、採択率が 56.3%の好結果を残しました。また大型種目では、新学術領域・領域提案型 1 件、基盤研究（S）1 件、基盤研究（A）3 件の採択に貢献することができました。

2. 2 拠点形成事業（COI 等）

平成 26 年度は海事科学研究科及び惑星科学国際教育研究プロジェクトからの依頼で拠点形成事業の申請 2 件を支援し 1 件の採択に至りました。また連携創造本部と連携し、平成 27 年度の予算勉強会を踏まえ、次年度に向けた体制構築を進めました。

2. 3 戦略的研究推進事業（CREST・さきがけ）

URA 組織発足初年度であるため目標設定はせず、講習会の企画、開催と、研究者からの依頼に基

づいた研究計画書作成支援を行いました。研究計画書作成の支援件数は、応募総数 36 件中 15 件であり、結果は、支援対象外から CREST 1 件のみの採択でした。

平成 26 年度の支援内容を振り返ることで採択数増加のための施策と URA の支援体制を検討し、平成 27 年度の目標と計画に反映させました。平成 27 年度はより積極的に支援を実施すること、応募数 50 件、採択数 3 件の目標を設定することとしました。

2. 4 省庁系大型競争資金

平成 26 年度は URA メンバーが競争的資金の知識と申請スキルを OJT で学ぶことを目的として取り組みました。文科省、経産省、総務省、農水省、環境省、厚労省の 12 種類の競争的支援について獲得を目指して支援をしました、その結果、文科省 A-STEP (FS ステージ探索タイプ) については連携創造本部に協力して 8 件を担当し、2 件が採択されました。

2. 5 論文の質・量 (国際化)

全学の研究力の国際化を促進し、国際共著論文割合の増加と Q 値の向上を目標に活動しました。目標を達成するために、1)国際共同研究の促進、2)国際人材交流の促進、3)教員個人の国際化後押し の 3 つの観点から取り組みました。これらの取組みは神戸大学の世界ランキングアップへも貢献するものです。

1) 国際共同研究の促進： 欧州機関の Horizon2020 ファンドと日欧共同公募ファンドに関して調査・分析しました。その調査・分析結果を基にして、国際共同研究プロジェクト(「神戸市スマートシティ構想」等)創成に向けた支援を行いました。また、経済学研究科で検討中の「環太平洋リサーチコンソーシアム構想」を始めとした各部局の動向に沿って、国際共同研究の外部資金公募情報の収集・提供等の支援を行いました。

2) 国際人材交流の促進： 神戸大学の現状課題と他有力大学の国際化施策を比較調査・分析した上で、神戸大学として今後打つべき諸施策を立案・設計し体系化しました。具体的には、国際研究力強化事業助成制度としての「国際共同研究短期滞在型」、「国際共同研究探索訪問型」、及びジョイントラボラトリー制度等があります。

3) 教員個人の国際化後押し： 若手教員を主な対象として英語論文の質向上を図ることを目標に、「英語論文校正支援プログラム」を立案・設計しました。

3. 中長期的な仕組みづくり

3. 1 若手研究者の支援・育成

平成 26 年度は若手研究者の発掘及び支援制度の設計に注力しました。若手研究者の発掘においては、セミナーを開催し、若手の優秀な研究者をリストアップし、人脈形成を行いました。つぎに科研費申請支援の仕組みを作りました。若手を対象に 40 件の申請支援をして 19 件の採択に成功しました。さらに神戸大学版テニュアトラックの制度設計の中心的役割を担うとともに、制度の実施を支援し、平成 27 年度には 5 部局 6 名のテニュアトラック教員の採用が計画される運びとなりました。さらに京大、阪大、神大、三大学連携の人材育成コンソーシアムの立ち上げに参画しました。

3. 2 新規プロジェクトの創成支援

将来の研究の柱ともなるべき分野横断プロジェクト、および神戸大学の特徴ともなるべき文理融合プロジェクトの創成を目指して、プロジェクト創成・支援の試行的取組みを行いました。代表的なものとして、科研費新学術領域（領域提案）を目指した人文学・法学連携プロジェクト、CREST（社会現象の数学モデル化の創成）を目指した理学研究科数学専攻、経済経営研究所、経済学研究科、システム情報学研究科による文理融合プロジェクト、CREST（新機能創出を目指した分子技術の構築）を目指した理学研究科・工学研究科連携プロジェクトの支援を行いました。いずれも、共同研究の可能性探索や連携チーム構築の支援・交流会等からはじまって、研究計画ミーティングの開催アレンジ、テーマ絞込みの支援、申請書作成支援と改善コメントまで、各テーマとも 10 回を超える打合せを経て申請書の完成に漕ぎつけました。また初期段階の文理融合共同研究テーマの探索支援として、システム情報学研究科と人間発達環境学研究科の連携支援を行いました。この活動から派生して科研費基盤研究(B)への共同申請につながりました。

3. 3 女性研究者支援

女性研究者数の増加や、上位職への登用を推進するなど、女性研究者の研究力の向上を図ることが URA の課題であると考え、男女共同参画推進室と協力し女性研究者支援を行う体制の構築を進めました。また、一部の女性研究者との関係構築や、CREST さきがけ申請支援に向けた女性研究者のリストアップを行いました。

3. 4 学内ネットワーク

URA の重要な活動基盤としての部局との関係構築を目的に、平成 26 年春のうちに全ての部局への訪問と、部局との双方向情報流通ルートの開拓を行いました。これらを活用して、年間を通じた競争的資金の情報配信や科研費をはじめとする分析情報の交換を行いました。また事務部門等との関係構築を進め、国際部、企画部、広報室などと業務上の協力関係を結びました。学内研究者との

関係構築としては、競争的資金の申請書作成支援をきっかけとして関係作りを開始しました。

3. 5 学外ネットワーク

対外的な情報収集と協力関係構築の足掛かりとするための学外ネットワーク構築に着手しました。他大学 URA 組織とのネットワーク構築を行い、8 大学を越える大学 URA 組織と情報交換のできる体制を構築しました。また大学研究力強化ネットワークおよび RA 協議会に加盟し、ネットワークの幅を広げました。競争的資金の案件対応では、ファンディング機関との情報交換を行いました。海外ネットワークとしては、欧州の URA 協会 EARMA および関連大学とのネットワーク構築を行い、共同研究先開拓の足掛かりとして活用を始めました。

3. 6 学内学外広報

URA ホームページの立上げ、URA 活動の学内外での周知、URA 広報活動の業務枠組み構築と定型化を目標としました。

URA の概要および活動、支援内容などを広く周知するためにホームページの作成・公開を実施し、科研の取組みや、科研費初心者説明会などの情報提供や資料掲載等を行い、学内の先生方に情報発信を行ってきました。平成 26 年度（8 月中旬～3 月末）は 4724 アクセスがあり、そのうち学内からのアクセスは（ネットワークドメインによる解析）全体の約 47%でした。大型競争資金等の公募情報の関係部局に対する配信活動を行いました（17 件以上）。国際広報ネットワーク構築に関する会議に出席、国際広報ツールの可能性を検討しました。北海道大学 URA シンポジウムに参加し、ポスター発表を実施しました。広島大学国際広報セミナーに参加し、国際広報ツールの他大学実践状況を確認しました。国際広報ツールに関する収集情報等を国際企画課、広報課と共有しました。

3. 7 研究不正防止

研究不正防止に関する文科省のガイドラインの改正と整合性を取るべく、神戸大学において「学術研究の不正行為の防止等に関する規則」を改正することとなりました。このため、研究推進部とともに文科省等の発信する研究不正防止に関するガイドラインの改正の周辺情報収集を進めました。また、学内の「学術研究不正防止委員会」に陪席して、神戸大学の「学術研究の不正行為の防止等に関する規則」の改正に貢献しました。

4. 研究戦略策定支援

研究戦略策定支援の重要業務として、研究力分析に注力しました。科研費や CREST・さきがけの採択状況の分析、トムソンロイター社のウェブオブサイエンス・データベースに登録された論文数、top10%、top1%論文数の分析、神戸大学が強みを持つ研究領域の分析、Times Higher Education 国際ランキング指標の分析などを企画評価室、研究推進課と協力しながら進め、資料にまとめて執行部や部局長会議で紹介し、研究戦略策定を支援しました。

上記の分析情報を活用して、科研費や CREST・さきがけの採択改善戦略の立案を行ったほか、12月頃より神戸大学戦略企画本部の設立準備にも協力しました。

5. むすび

URA の平成 26 年度の活動内容と成果について、研究力評価指標の改善に関する取組み、中長期的な研究力強化の仕組み作り、および研究戦略策定支援に分けてコンパクトに要約しました。URA の広範囲な業務について、手探りではありましたがまずまずのスタートを切ることができ、業務の基盤構築とともに、より高みを目指した次年度の活動に向けて、数々の経験やノウハウを蓄積することができました。最後に、手厚いご支援とご協力を賜りました教員研究者の皆様、事務職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。